

字素の配列について--- 一般文字学導論

中村雅之

1. はじめに

西田龍雄(1986)および吉池孝一(2003)では、文字の最小単位を「字素」と呼んでいる。ラテン文字では各文字が字素であり、漢字では偏や旁が字素になる。本稿では、字素がどのような組み合わせや配置によって語や文を表記するかという、その方式(西田1986における「形字法」および「統字論」)を外観し、一般文字学のための導論としたい。

2. 文字の単位

吉池(2003)では、文字の最小単位を「字素」とし、語や形態素を書き表す字素の集合を「表意字素群」と呼んで、その中間段階を以下のように設定した。(例はいま任意に選んだ)

①字素----ラテン文字「y」「o」「u」など

仮名「き」「ゝ(濁点)」「ゃ」「く」など

ハングル「ㅅ(c)」「ㅏ(a)」「ㅣ(i)」「ㅓ(g)」など

漢字「山」「凡」「虫」など、種々の部首も字素になる

②表意字素群----ラテン文字「y」「o」「u」など

仮名「ぎ」「ゃ」「く」など

ハングル「ㅅ(c)」「ㅏ(ai)」「ㅓ(g)」など

漢字「山」「風」「嵐」など

③表音節字素群----ラテン文字では一般にこの単位はない

仮名「ぎゃ」「く」など

ハングル「ㅅ(caig)」「ㅏ(han)」「ㅓ(gug)」など

漢字「山」「風」「嵐」など

④表意字素群----ラテン文字「you」など

仮名「ぎゃく」など

ハングル「ㅅ(caig)」「ㅏㅓ(han-gug)」など

漢字「山」「風」「嵐」など

①の「字素」はそれぞれの文字組織における最小単位で、仮名における濁点のよう

な識別記号や小字の「ゃ」「ゅ」「ょ」「っ」なども字素になる。②の「表字字素群」は文字の単位として自然に認識できるもので、字母表などに記されうるもの。③の「表音節字素群」は仮名やハングル、パスパ文字などに見られる音節単位のまとまり。個々の漢字は表音節字素群でもある。④の「表意字素群」はいわゆる単語の表記。ただし、それが語であるか形態素であるか、あるいはフレーズであるかは、言語および文字組織ごとに異なる。

上の四段階の全てを明瞭に区別する文字組織は非常に少ない。ハングルは四段階を区別する数少ない例である。仮名は全てを区別しているようにも見えるが、実際には表意字素群による分かち書きがなされないため、③の表音節字素群の段階までしかないと見なすべきであろう。仮名は漢字との組み合わせや、平仮名とカタカナの書き分けによって初めて表意字素群の認識が可能になる。「私は学生です」「彼はオタクだ」という文では、「は」「です」「だ」という仮名表記は表意字素群を形成しているように見える。ラテン文字やウイグル文字など直進配列(これについては後述)の表音文字の多くは、「字素」=「表字字素群」であり、その次の段階が表意字素群になる。その場合、それぞれの表意字素群はスペース(吉池2003では「#」で表記)によって分かち書きされる。

### 3. 字素の配列

中村雅之(2008)で述べたように、字素の配列には直線的に書き進む「直進配列」と、行の進行方向に対してクネクネと書き進む「蛇行配列」がある。ラテン文字は左から右への直進配列、アラビア文字は右から左への直進配列、パスパ文字は上から下への直進配列である。一方、チベット文字の場合、行は水平に左から右へ進むが、「表字字素群」では字素が上下にも配される蛇行配列であり、漢字は字素が「左→右」「上→下」「左→右→下」のように様々に配されて「表字字素群」(「表意字素群」でもある)を形成する蛇行配列である。

字素の配列は当然のことながら文字の系統と深い関わりを持つが、系統は必ずしも決定的な要素ではない。ソグド系文字のようにモンゴル文字、満洲文字に至るまで一貫して直進配列を守っている例もあれば、パスパ文字のように、蛇行配列のチベット文字を材料にして作られたにも関わらず、ウイグル文字に倣って直進配列になっている例もある。契丹小字のように、篆書体では直進配列だが、一般の表記では蛇行配列というものもある。

#### 4. 分かち書き

表意字素群が分かち書きされるか否かという点も重要な視点である。ラテン文字やアラビア文字などのアルファベット系文字は一般にスペースによる分かち書きをおこなっている。古代のアルファベットでは分かち書きを行わない場合もあり、またスペースではなく区分点(一点、二点、三点など)による分かち書きをすることもあった。

分かち書きによって語の認識を容易にすることは、とりわけ表音文字にとっては極めて重要である。元代のパスパ文字が元朝の崩壊とともに廃れた原因として、しばしばその書きにくさが指摘される。確かにウイグル文字に比べれば続け書きの出来ないパスパ文字は日常の筆記にはあまり向かないようにも見えるが、その点は漢字や仮名やハングルも大差ない。むしろ、パスパ文字の最大の欠陥と言えるのは、語の単位での分かち書きが行われなかった、つまり表意字素群が存在しなかった点にある。パスパ文字では分かち書きは表音節字素群ごとになされる。例えば「jarliq-un(聖旨の)」という文節は「jar # li # qun」(#はスペースを示す)と綴られることになる。表音節字素群ごとの分かち書きはチベット文字の方式を受け継いだものであるが、単音節語が中心で孤立語的な性格の強いチベット語に比べ、接辞が豊富で多音節語根の多いモンゴル語の表記には、表意字素群を持たないパスパ文字は不向きな文字組織であったと言わざるを得ない。あたかも仮名だけで日本語を綴るようなものである。

漢字は字素の集まりである「表字字素群」がそのまま「表音節字素群」であり「表意字素群」でもあるという文字組織である。そのために分かち書きをあえて行う必要がなかった。日本語が漢字と平仮名・カタカナの組み合わせによって分かち書きに準じた表記をしていることはすでに述べた通りである。ハングルは創製当初は分かち書きをしなかったが、現在では明瞭におこなっている。

#### 5. 一般文字学のために

ある文字の構造を研究する時、他の文字との比較が有効となる場合がある。そのような時、あらゆる文字組織を共通の視点で解釈する手法を用いれば、研究がより説得力を持つであろう。「一般文字学」の確立が望まれる所以である。

概括的に言えば、一般文字学には、構造の研究と運用の研究がありうる。今回扱った字素の配列は構造の研究の中核をなす分野である。最後に字素の配列の研究がハングルにどのように応用されたかを示して、一般文字学の導論としたい。

ハングルという文字組織が15世紀にいかにして成立したかについては、これまでも何度となく論じられたことがあった。有力な説は主に二つあり、一つはパスパ文字起源

説、もう一つは全く独自に創製したというものである。しかしどちらの説も方法論的な合理性を欠いている。パスパ文字との関連は、ハングルの幾つかの字形が似ていることと音節単位で記すことだけであるが、いずれも偶然の一致であることを否定するだけの根拠がない。また、パスパ文字は直進配列だがハングルは蛇行配列という大きな相違点もある。一方、『訓民正音』の発見以後、ハングルが独自に創製されたものという見方も広まったが、『訓民正音』の記述はいかにも“後づけ”の説明という印象を免れない。母音を「天・地・人」に当てたなど、字形の説明に合理的な必然性がないのである。

字形の問題はおくとして、字素の配列という面から見れば、ハングルは漢字を参考にして蛇行配列と表音節字素群を持ったと考えるのが合理的である。しかし最近、吉池(2010)に興味深い説が提出された。『訓民正音(解例本)』の「合字解」に今では用いられない次のような配列が見える。

bjag	bsgym	dergs	bsdai
①②③	①②③	①	①②③④
④	④	②	
	⑤	③④⑤	

水平に三個ないし四個の字素を並べる方式は現在では見られないが、初期のハングルでは用いられていたらしい。吉池氏は、これらの奇妙な配列がチベット文字を参考にした可能性があるとした。確かにこれらの配列を漢字からの影響だけで説明するのは無理がある。音節字素群の内部に四個の字素を水平に並べる方式や蛇行配列など、チベット文字との共通項は多い。パスパ文字との間に字形の類似が指摘されていたが、それも実は(パスパ文字の材料となった)チベット文字と関連づけるべきかも知れない。実際の運用を重ねる中で、結局上に見たような配列は淘汰され、漢字風の字素配列が残ったということなのであろう。

以上のように、ある文字組織がいかにして成立したかを考えるには、字素の配列という一般文字学の発想が不可欠であり、単に字形の類似などを問題にしているだけでは十分ではない。また、ハングルの例に見られるように、字素の配列は初期の試行錯誤の段階と、運用が成熟した段階では異なることがある。契丹小字における篆書体の直進配列(ウイグル文字の影響)や、ハラホト文書に見られるパスパ文字の水平配列の字母表(チベット文字の影響)なども初期の試行錯誤の段階を示すものであろう。

今回は字素の配列という一般文字学の中心課題について概述した。一般文字学における構造の研究には、ほかに母音の表記法、語頭・語中・語末における字形の間

題などがあり、また運用面の研究として書体の問題や正書法、外国語音の表記法などがある。これらについては別の機会に述べることにしたい。

<参考文献>

西田龍雄(1986)「言葉と文字---文字学」『言語学を学ぶ人のために』(世界思想社).

吉池孝一(2003)「文字の単位」『KOTONOHA』4.

中村雅之(2008)「表音文字の配列」『KOTONOHA』72.

吉池孝一(2010)「漢字関連文字を知る 18. 非漢字系文字(ハングル)」, ウェブサイト「古代文字資料館(<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/>)」